

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 30 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21500567

研究課題名（和文） 子どもの死の認識の発達に関する研究

研究課題名（英文） Development of Children's Death Cognition

研究代表者

近藤 卓（KONDO TAKU）

東海大学・文学部・教授

研究者番号：60266450

研究成果の概要（和文）：

小学生から高校生までに使用可能な，死の認識の発達を調べるための心理テスト「死の認識尺度」を開発し，全国から複数の学校を選び調査を実施した。

その結果，従来から知られていた死の認識（科学的な認識としての「死の不動性」「死の不可避性」「死の不可逆性」）以外に，「死の物語性」（「生まれ変わる」「魂は死なない」「心の中に生きている」など）という概念を分別し明確化することができた。それにより，近年議論されてきた「死の不可逆性の揺らぎ」，つまり死んでも生き返ると考える児童・生徒の存在の問題に，一石を投ずる材料を手にすることができた。言いかえれば，死んでも生き返るという考え方の中に，「死の物語性」が混在していた可能性があるということである。

研究成果の概要（英文）：

We developed the Death Cognition Inventory for Children (DCIC); applicable for 10 to 18 years old. So we investigated the death cognition of Japanese children by DCIC.

As a general knowledge, Children's Death Concept is built by three elements: Non-functionality, Universality and Irreversibility. In the decades, some researchers found that children believed that dead man could live again after death. We found another element of death which is Narrativity. We believe that the researchers could not clearly divide the Narrativity from Irreversibility.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学

キーワード：死生観の教育・心理的発達

1. 研究開始当初の背景

現代社会におけるさまざまな環境の変化などの影響を受けて，子どもたちの意識の変化が起きている。とりわけ，死の認識が本来

あるべき発達を遂げていないという問題が指摘されている。近年，いじめ，不登校，保健室登校，校内暴力や少年犯罪，非行，未成年の飲酒・喫煙，薬物乱用や性行為の逸脱な

どの問題が顕在化し、「いのちの大切さを教える教育」や「心の教育」の必要性が議論されるようになった。すなわち、それらの問題行動の背後にはコミュニケーション能力の低下やいのちの大切さを知らない子ども、死んだら生き返ることができると考えている子どもの存在が想定され、だからこそ技能としてあるいは知識として心を教育することが必要できるとされ、いくつもの試みが行われてきている。とりわけ、子どもの死の認識の発達について、テレビゲームの影響などによる仮想現実と現実世界との区別の不分明、遊びの変化や自然体験の減少などから、さまざまに議論され問題視されている。先行研究は少なくないが、時代性や地域性あるいは背景となる文化の違いなどを考慮したときに、現代の日本の子どもたちの実態を正確に反映したものとはいえない。

そこで、本研究では現代日本の子どもの死の認識の発達について、より一般化できる結果を得ることを目的としている。そのことによって、子どもへの的確な教育や指導のプログラムを立てて実行することが可能になると考えられる。

研究代表者は、平成17年度から3年にわたった科学研究費補助金萌芽研究で、いのちの教育の実態調査として、全国小中学校各500校を対象に郵送法で質問紙調査を行った。そこでの結果によれば(近藤, 2006; 近藤, 2007), 回答のあった250校について、動物の飼育経験や植物の栽培経験などの、「生や死に触れ考えさせる経験」を確保した教育的活動が実施されていた。すなわち、いのちの教育に関連する内容を含んで実施される教育的活動として、「生や死に触れ考えさせる経験」をさせ、生きるものについて、死にゆくものについて理解させることを目指していると考えられる。

しかしながら、こうした教育活動を実施する場合に、教育の主体である児童生徒のレイネスが明らかになっている必要がある。つまり、発達段階に応じた「生や死」の課題を設定する必要がある。子どもたちが「死をどう理解しているか」に関しては、マリア・ナギー(1948)やスピース(1984)の研究にも見られるように、死の「不動性」(死んだら動かない)、「不可避性」(誰もが死ぬ)、「不可逆性」(死んだら生き返らない)という特性について理解しているかどうかを基に評価されてきた。日本の子どもの死の不動性については、おおよそ6歳~7歳で理解することが示されている。仲村(1994)は、「死んだ人は見たり聞いたりすることができますか」という質問に対して、3~5歳の子どもでは36%が「できる」と回答し、6歳~8歳の子どもでは82%が「できる」と回答したという。同様の結果は、他の調査研究においても支持

されている(山岸ら, 1995; 松本ら, 2003)。死の不可避性についての検討でも、ほぼ6歳~7歳で理解している可能性が示唆されている。自分がいつか死ぬということに関しては、常葉ら(1979)が「あなたはいつか死にますか」という質問に6歳~12歳の対象はほぼ理解しているという結果を得ており、自分以外の死に関する認識についても、そのほかの調査でも同様の結果を得ている。(東京都立教育研究所, 1983; 上薊, 1993; 山岸ら, 1995; 牧野, 1996; 佐野, 1999; 生と死の教育研究会, 2003)

また、死の不可逆性については、3歳~14歳の子どもを対象にして、「死んだ人は生き返れますか」という質問に対しては3歳~5歳の子どもでは「生き返れる」と回答した子どもが29%であるのに対し、12歳~13歳では「生き返れる」と回答した子どもは40%であった(仲村, 1994)。また「人間体で生き返れますか」という質問に対しては3歳~5歳の子どもの24%が「生き返れる」と回答したのに対し、12歳~13歳の子どもでは15%の子どもが「生き返れる」と回答した。このように死の不可逆性に対する調査結果で、死んだ人は生き返れると思うという回答が、他の2つの特性に比べ比較的高い割合で理解していない可能性を示唆する結果を示している。

しかしながら、死の不可逆性についてより具体的な質問の仕方でも回答を求めた調査、たとえば東京都立教育研究所(2003)の調査によれば、「園・校で飼っている生き物が死んでも、また生き返ると思いますか」という質問に対し、7歳の子どもの90%が、また9歳の子どもにおいても80%が「生き返れない」と回答している。また、自らの飼育する生物だけでなく、「自分」がもし死んでも、あるいは「お父さんとお母さん」が死んでも生き返ることができるかを質問した場合、「自分」についても「お父さんとお母さん」についても7歳~9歳の子どもの80%が「生き返れない」と回答している。このように、死の不可逆性については、抽象的な概念における死の認識と、具体的な存在の死の認識を区別し、明確にした質問の仕方によって結果が大きく変わることが示唆されている。すなわち、死の不可逆性を検討する場合には、質問の仕方に留意する必要がある。

死の不可逆性に関連して、生き物(生きているもの)と無生物(生きていないもの)の区別の認識が、どのように発達するかを研究した調査もある。その先行研究によれば、生育年齢に比例して、理解が科学的に正しいものへと発達するとは限らないことが示唆されている。栗林(1952)の行った調査によれば、汽車、時計、ラジオに対して、6歳~7歳の子どもの8割以上が生きていると回答してい

るが、8歳～10歳の子どもの正しく理解していることが報告されている。また同時に回答に「わからない」という回答が増加する傾向も報告されている。多田納（1992）は、「石は生きている」と回答する子どもが小学校2年生では4.8%だったのに対し、6年生では13.9%に増加していることを指摘し、面接調査でそのような子どもたちの中には「文学的・哲学的な見方」によって生物とみなしていることを明らかにしている。同様に、生と死の教育研究会（2003）などの調査によって、10歳以降の子どもの、物に意識や感情があるとするアニミズムが見られることが示されている。

以上に示したこれまでの諸研究によれば、死の認識について質問のしかたや個々の子どもの受け取り方について、具体的かつ個別的に聞いていくことが必要であることが示唆される。また、メディアの急激な発達や生活環境の変化なども考えれば、現代の日本の子どもの正確な実態を知るための詳細かつ大規模な調査研究が必要とされていると考えられるのである。

上で述べた先行研究の結果を概観すると、以下のような問題点が明らかになる。第一に、これらの調査はすべて有意抽出による対象に対して実施されたもので、一般化するには注意が必要なものである。無作為抽出による、より一般化の可能な対象を調査する必要がある。第二に、死の概念の、特に死の不可逆性について抽象的に質問をした場合と具体的に質問をした場合での結果の大幅な違いが指摘されている。第三に、死の概念の三要素（死の不動性、不可避性、不可逆性）について、およそ理解することができると考えられる年齢を過ぎても、「死んでも動くことができる」「誰もが死ぬわけではない」「死んでも生き返ることができる」と回答した少数の対象について、さらに調査をする必要がある。近年、凶悪犯罪を起こす少年がこのような考え方をしている可能性を、メディアを通じて垣間見る機会がある。これまでに実施された調査は、量的調査による統計的手法であるために、明らかにならなかったことが多い。これらの少数の回答をする対象について面接調査などの質的調査を用いることで、より詳細な死の概念の理解について追及することができる。本研究では、上記にあげた先行研究での問題点を改善し、より多角的に子どもの死の概念の発達を横断的に明らかにする調査を実施する。

これまでの研究成果から指摘できるように、死の概念の発達を検討する際に、特に死の不可逆性については、より多角的な検討を要することが明らかとなっている。それは

「死んだらどうなるのか」という死の判断基準が、対象となった子どもたちによって異なるものであるために、一律に「死んでも生き返ることができるか」という質問項目を質問紙によって実施した結果は、対象の概念発達を正確に明らかに示したものではない。本研究では、初年度に面接法を用いて子どもたちの概念発達を質的に検討し、詳細に検討を行う。その検討を踏まえた上で、質問紙を作成し、先行研究よりも多角的な視点から対象の死の概念を明らかにする。子どもたちの問題行動が、注目されるたびに「現代の子どもたちは死んだら生き返ると勘違いをしている」という言説が流れるが、その根拠になる調査結果にはより多角的な検討を要することが指摘できる。本研究において、死の概念の多角的な点が明らかになれば、今後の子どもたちの概念発達を考察していく上で、新たな視点を与えるものとなりうる。

2. 研究の目的

現在の日本における、子どもの死の認識の発達について明らかにすること。

3. 研究の方法

中学生を対象としたブレインストーミングによって得た質的データと、それをもとに作成した心理尺度による中学生を対象とした量的データを、総合的に分析・考察した。

質的研究として、詳細な面接を踏まえた考察をすることによって、子どもたちの具体的に個別的な死の認識の発達について深い理解を得ることができる。また、それを踏まえての量的研究によって、より一般化した全体像の中で、それらの具体的かつ個別的な発達の様子を解釈することが可能になる。

また、これまでの内外の先行研究を踏まえたうえで、現代の日本の子どもの死の認識の発達の現状と、その特徴を極めて明確に描き出すことが可能になり、その成果を社会に還元していくことによって、子どもの育成・教育に明確な足がかりを与えることができる。

また、そうした死の認識の発達と自尊感情の関係、さらにはその自尊感情を育む活動としての共有体験の意義にまで視野を広げて今回の研究計画が立てられている。

4. 研究成果

まず質的研究として、以下の方法と内容で実施し結果を得た。2010年7月から11月にかけて関東A中学校、沖縄B中学校、関西C中学校の全3校の生徒、各校10～18名にブレインストーミングを実施した。生徒の抽出に関しては、各学校の教員に一任した。さらに倫理的配慮として、学校長、教職員の了解を得た上で、生徒本人と保護者に文書で調査の目的等を説明し、口頭あるいは文書によ

て調査参加の同意を得た。ブレインストーミングによって産出された語は KJ 法を用いてグループ化を行った。ブレインストーミングは、各学校で学年毎に実施したが、分析は最終的にすべての学校を統括して行った。

グループ化に際しては、心理学を専攻する学部生 2 名と大学院生 2 名が参加した。

ブレインストーミングの実施時間は学校ごとにことなるが、各校およそ 30~50 分程度で産出された語数は、全体で 981 語であった。次に示す図 1 が、KJ 法による A 型図解彼の結果である。

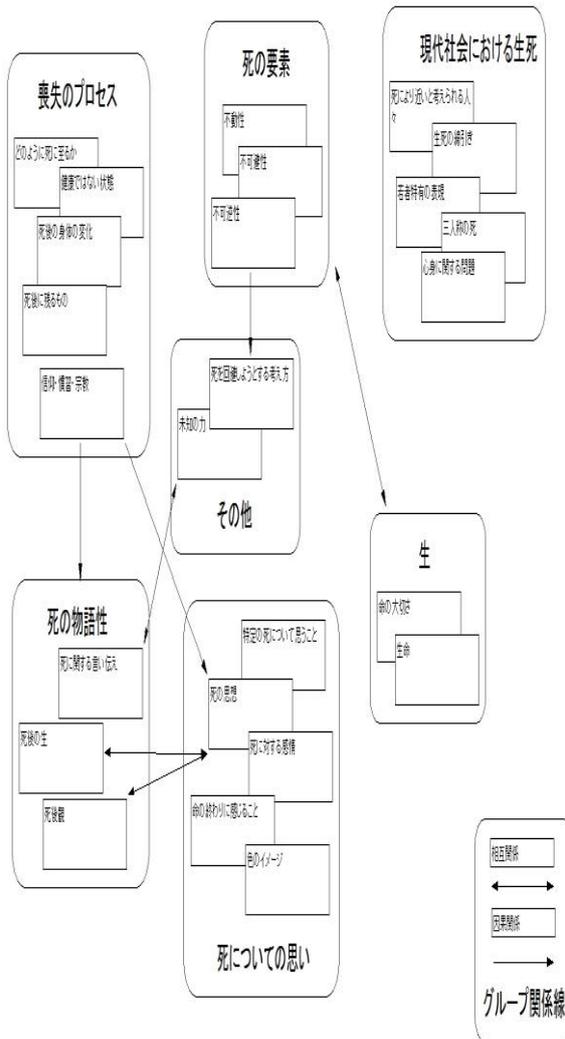


図 1. ブレインストーミング結果 (KJ 法による A 型図解)

次に、量的調査としては、以下の方法で実施した。小学生から高校生までに使用可能な、死の認識の発達を調べるための心理テスト「死の認識尺度」を、上記ブレインストーミングの結果をもとにして開発し、全国から複数の学校を選び調査を実施した。具体的には、本調査は中国地方 A 中学校、都内 B 中学校に在籍する中学生計 914 名を対象とした。

その結果、従来から知られていた死の認識（科学的な認識としての「死の不動性」「死の不可避性」「死の不可逆性」）以外に、「死の物語性」（「生まれ変わる」「魂は死なない」「心の中に生きている」など）という概念を分別し明確化することができた。

表 1. 死の認識 (因子分析結果)

項目	因子			
	1	2	3	4
手足が動かなくなると思う	.906			
冷たくなると思う	.872			
固くなると思う	.788			
動かなくなると思う	.768			
話ができなくなると思う	.555			
いつかは必ず死ぬと思う		.871		
人は誰でも死ぬと思う		.797		
いつか死ぬのは仕方がないことだと思う		.759		
人には寿命があると思う		.514		
それは定められたものだと思う		.471		
魂は死なないと思う			.786	
誰かの心の中に生きると思う			.603	
輪廻転生(生まれ変わり)する			.580	
誰かの思いになると思う			.567	
死んだ人たちに会えると思う			.530	
終わりだと思う				.661
それはこの世とお別れする				.631
何もできなくなると思う				.525
今の人生の終点だと思う				.512

表 1 に示したものは、全 19 項目で構成された尺度を因子分析（主因子法、プロマックス回転）した結果である。第一因子が「不動性」、第二因子が「不可逆性」、第三因子が「物語性」、第四因子が「不可逆性」となっている。また、本尺度の信頼性係数 α は .801 となり、十分な値であった。

これにより、近年議論されてきた「死の不可逆性の揺らぎ」つまり、死んでも生き返ると考える児童・生徒の存在について、一石を投ずる材料を手にすることができた。

すなわち、従来の調査による「死の不可逆性の揺らぎ」には、「死の物語性」が混在しており、それを峻別できていなかったと推察されるのである。

現在、こうして得られた尺度を用いて、全国の数十の小・中・高等学校の児童生徒数千人を対象とした調査を継続・展開中で、この尺度のさらなる一般化・標準化を進めているところである。

以上をまとめると、子どもの死の認識について、これまで言われてきたいわゆる科学的な理解（不動性、不可逆性、不可避性）とともに、物語性と名付けられる、豊かな死への

理解があることが分かったということになる。

また、本研究には以下の四つの限界と課題がある。

第一に、調査対象が無作為に抽出されたものではない。それらは、研究の趣旨に賛同した二つの中学校に限られている。そうした意味で、地域的にも社会経済的にも偏った調査データとなっている。

第二は、調査対象数の少なさである。全体としては900名を超える数となっているが、男女別、学年別にすれば各群は150名程度になるので、有意確率の検定などにおいて十分な数とはいえないかもしれない。

第三は、対象が中学生に限られている点である。したがって、「死の認識の発達」を調べるという本研究の狙いには不十分であった。事実、学年による平均値の差の検定を分散分析によって行ったが、有意な差はほとんど得られなかった。やはり、中学生になると死の認識はある程度安定すると言われているとおりなので、今後は小学生まで調査対象を広げる必要がある。

第四に、今回の調査研究で用いた尺度には、本研究における分析・考察をとおして、さまざまな課題が発見された。したがって、今後はこれらの課題を修正した、より精緻化された尺度を用いて、対象を増やした調査が望まれる。

すでに、2012年度へ向けて多くの小・中学校との共同研究の方向性が見えてきているので、今後はそうした学校との協力のもとに、精緻化された尺度を用いてさらに調査を進めて行きたいと考えている。

<引用文献>

上藪恒太郎 1993「子どもの死の意識における感情表出年齢と道徳教育」『長崎大学教育学部教育科学研究報告第45巻 pp.11-25』

栗林公一 1952「児童における生命観の調査」『信濃教育通号781号 pp.47-52』

牧野圭一(1996). 「学校におけるデス・エデュケーションのあり方」『大分県教育センター研究紀要第27巻 pp.99-102』

松本勝信他 2003「動物の死に対する児童の概念」『理科教育研究年報第27巻 pp.37-48』

Nagy, Maria.(1948). The Child's theories Concerning Death. *Journal of Genetic Psychology vol.73:3-28*

仲村照子 1994「子どもの死の概念」『発達心理学研究 第5巻第1号 pp.61-71』

生と死の教育研究会 2003『幼児・児童の死生観についての発達段階に関する研究』

Speece, Mark W. 1984 Children's Understanding of Death. *Child Development 55:1671-1686.*

多田納育子 1992「児童の生命観の発達に関する

研究」『生物教育 第32巻第4号 pp.253-261』
東京都立教育研究所 1983「子供の「生と死」に関する意識の研究」『東京都立教育研究所』

常葉恵子, 伊藤和子, 岡田洋子, 岡堂哲雄 1979
「児童期における死の概念の発達」『聖路加看護大学紀要第6巻 pp.31-41』

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

- ① 弓田千春, 佐々木江里子, 大庭由起子, 小林由香, 望月美紗子, 中川智恵, 近藤卓, 子どもの自尊感情, 死の認識, 共有体験の関連について (第1報), 第15回日本学校メンタルヘルス学会, 平成24年3月10日, 国立オリンピック記念青少年総合センター (東京)
- ② 佐々木江里子, 小林由香, 弓田千春, 近藤卓, 中学生における死の認識について, 第58回日本学校保健学会, 平成23年11月12日, 名古屋大学 (愛知県)

[図書] (計2件)

- ① 近藤卓, 金子書房, 自尊感情と共有体験の心理学, 2010, 218
- ② カール・ベッカー, 弓山達也, 岩田文昭, 近藤卓, 谷田憲俊, 得丸定子, 林貴啓, 山田真知子, 山本佳世子, 大正大学出版会, いのち 教育 スピリチュアリティ, 2009, 265-276

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤卓 (KONDO TAKU)
東海大学・文学部・教授
研究者番号: 60266450